広報たかなべ

2015. 9. 18　NO. 396

・特集 先人の教えを学び未来へつなぐ
・人事行政運営等の状況の公表について
・高鍋町消防団第9部 東児湯支部消防操法大会で優勝！
・ご存知ですか？情報公開制度・個人情報保護制度
・パブリックコメント制度報告
・「地方創生」を考える
・車両競技公益資金記念財団の助成事業により整備されました
・国勢調査への協力をお願いします！
・社会保障・税番号（マイナンバー）制度が始まります！№2
・高鍋の夏★
・西都児湯斎場「再生の杜」が完成しました
・まちの話題
・わが町の宝物

みんなを笑顔にするきゃべつ畑のひまわりが咲きました

町を代表する夏のイベント「きゃべつ畑のひまわり祭り」が8月15、16日に行われ、約8,000人の来場者でにぎわいました。7月の長雨の影響で、イベント当日はヒマワリが満開にはなりませんでしたが、来場者は元気に咲いたひまわりと笑顔で記念写真を撮って楽しんでいました。

先人の教えを学び 未来へつなぐ

高鍋藩7代藩主・秋月種茂が1778年に明倫堂を創設して230年余り。その精神は、時を越えて今もなお、町民に息づいています。
多くの逸材を輩出した明倫堂の精神を受け継ぎながら、郷土への愛と誇りを持つ子どもを育成するための町の教育の取り組みを紹介します。

担任の話に姿勢正しく耳を傾ける高鍋西中1年1組の生徒たち

種茂の功績

豊臣秀吉の九州征伐により、筑前国（現在の福岡県朝倉市）から日向国財部（現在の高鍋町）へ拠点を移された秋月氏。戦国時代から明治時代に廃藩置県が行われるまでの約300年もの間、この町は、秋月家3万石の城下町として栄えました。

高鍋藩は第4代藩主種政のころから、これまで行われてきた諸制度の整備を多方面に拡大していきます。そして、宝暦10年（1760年）、父の隠居により18歳で家督を継いだ第7代藩主種茂は、父祖の遺業を継ぎ、藩の財政基盤を充実させるため藩政全般にわたり斬新な発想と周到な計画によってさまざまな施策を行います。荒地や山林伐採跡地などの大規模な開墾を行うだけでなく、一般農民にも開墾を奨励し、行った者には一定期間、年貢を免除する「鍬下年季（くわしたねんき）」を行い、耕地の拡大を図りました。また、農地保全事業として、溜池や水路などの築造を数多く行うだけでなく、林業や製塩など産業にも力を注ぎ、安定した収入を得るための施策に取り組みました。

財政基盤の充実を図る一方で、庶民の生活にも心を配り、救農対策や福祉の充実にも尽力します。農民の3人以上の子どもには、米または麦を支給するという現在の児童手当に相当する制度を先駆けて行ったことは有名ですが、疫病の救済や災害対策、飢餓対策など藩政全般において、細やかな政治を行いました。

平成18年に町内の3・4年生を対象に作成した「秋月種茂ものがたり」から民話を紹介します。

家臣とともに村を見まわっていた殿様は、田んぼでせっせと働く一人の農民を見つけました。見ると、田の横に農民の弁当が置いてあります。殿様は家来にその弁当を開けさせました。すると、その弁当は、米つぶなどはまったくなくて、菜っ葉ときび団子でできた、あまりにもおそまつなものだったのです。殿様はしばらくの間じっと眺めておられましたが、目には涙が光っていました。殿様は家来とともにその弁当を食べてみましたが、まずくてとても食べられるようなものではありませんでした。殿様はその農民を呼んで「自分たちはおまえの弁当を無断で食べ、おまえの弁当をなくしてしまった。まことにすまないことをした。どうかゆるしてくれ。そのかわり、自分たちが持ってきた弁当があるのでこれをやる。」といって、酒、魚に、米のご飯をあたえられました。農民は意外なありゆきにびっくりしましたが、大変ありがたく思うとともに、熱い涙を流しました。殿様の優しさを感じて、このようすを見た家臣たちも感激の涙を流したということです。

人倫を明らかにする教育方針

その種茂が最も力を注いだのが「教育」です。

種茂が明倫堂における教育について述べている「明倫堂記」には、「理想国家の実現には、賢才を得ることが根本であり、学校はその人材を成就させるところである」と残し、教育は国家を治めるうえの最も大切な事業である、と説きました。そして、学校教育の目標は、人間として守るべき道（人倫）を明らかにすることとし、生徒だけでなく、指導者もそして自らをも律することに努めました。

また、種茂は明倫堂に、現代の校則に当たる「明倫堂学規」を定めました。これには、日常生活の指導目標ともいえる18条の教育理念があり、身だしなみを整えることや本を読むこと、年長者へ敬意を払うことなど現代に通じる教えが書かれています。

この「明倫堂学規」を8項目にまとめ、小学生にも理解できる言葉でわかりやすく編成したものが「新明倫の教え」です。

種茂ゆかりの品が残る高鍋町歴史総合資料館

編成を行った町教育委員会では、平成25年度に町内の小中学校にこれを配布し、各学級に掲示するなど、児童生徒の健全育成の指導に活用しています。

さらに、「新明倫の教え」は児童生徒の育成に限らず、生涯の教訓を説く教えであり、生涯学習にも通じるとして、平成26年度には、町内の各公民館にも配布を行っています。

「国づくりは、人づくり」を信念に、武士だけでなく庶民の教育まで力を注いだ種茂。その後も明倫堂の精神は受け継がれ、明治時代以降も石井十次をはじめ、多くの逸材を輩出しました。この流れが、高鍋を「文教の町」と呼ぶ由縁となっています。

明倫堂の教えが時を越え、「新明倫の教え」として生まれ変わり、この精神を受け継ぐ取り組みが、今、積極的に行われています。

新明倫の教え

一 学校・家庭・地域のきまりを守り、礼儀を正しくします
一 周りの人に居場所を知らせます
一 歩く、見る・聞く・話すを正しくします
一 身だしなみを整え、食事に気をつけます
一 姿勢、読み・書きを正しくします
一 整理・整頓を心がけます
一 年上を敬い、同年と親しみ、年下を慈しみます
一 志を高く、学業を修め、自分の良さを生かします

「新明倫の教え」に書かれた8項目。原本には、すべての漢字にふりがながふられ、小学1年生から教えを読むことができる

子どもから大人まで町全体で「新明倫の教え」に取り組んで欲しい

萱嶋　稔 さん

【profile】平成16・17年度、高鍋西小学校校長。平成18年度から高鍋町教育委員会教育長に就任。「新明倫の教え」制定のために尽力。平成26年7月に教育長を退任し、現在、高鍋町美術館館長として、美術館運営に携わる。

明倫堂の校則として定めた「明倫堂学規」には、人間としての教えをもとに、人々のためになるような行動ができる人を育てようとする、現代にも通ずるすばらしい言葉が残されています。

この教えを町内の小中学校でも取り組めるようなわかりやすいものとして編成することができないかと、町民の皆さんからの声があり、町教育委員会が編成に取り組みました。

しかし、いざ、現代風にわかりやすく編成すると言っても、当時の言葉や教えを小学生にも理解できる言葉に置き換えることは容易ではありませんでした。そこで、町教育研究所の幸丸義信指導員と各学校から集まった研究員の皆さんに編成の協力を依頼するとともに、県文書センター主席運営嘱託員の永井哲雄さんに「明倫堂学規」の文意の要約や同類項の集約、監修をお願いしました。これにより「明倫堂学規」は、誰にでもわかりやすい「新明倫の教え」に生まれ変わり、学校教育だけでなく町全体でも教えの実践に取り組むことにしました。

この教えには、ごく当たり前のことではありますが、とても大切なことが書かれています。教えの中にもある「志を高く、学業を修め、自分の良さを生かす」という言葉にあるように、高鍋町の子どもたちには、この町で育ったことに誇りを持ち、自分に自信を持って、自分の良い所を伸ばそうとする子どもに育って欲しいと思います。

また、子どもだけでなく大人も日ごろから自分を磨き高め、あいさつや礼儀など基本的なことは、学校と保護者と地域が一緒になって教え、育てていくことが大切なのだと思います。

今、町内の各学校で取り組んでいるコミュニティ・スクールは、学校と保護者、地域の皆さんが一緒に子どもを育てようとする取り組みです。元気いっぱいで心豊かな高鍋の子どもを育てるために、「新明倫の教え」に沿ったコミュニティ・スクールにみんなが一緒になって取り組んで欲しいと思います。